

タイトル	会話における「認識性」を巡る英語の事例分析
著者名 (所属)	早野 薫 (日本女子大学英文学科)
連絡先 Eメール	kaoru0530@gmail.com
<p>論文内容</p> <p>「誰が、何を、どのように知っているのか」という認識性の問題は、さまざまな分野において長く研究者の関心を集めてきた。言語学では、認識的モダリティ標識、証拠性標識などの記述をもとに、知識の確かさや出どころが、文法によってどのように区別されるのかが研究されてきた。語用論では、認識的モダリティ標識や証拠性標識を会話相手やトピックに応じて適切に使用する語用論能力の有り様を解明する試みが積み重ねられてきた。</p> <p>いっぽう、会話分析においては、認識性を「誰が、何を、誰よりも知っているべきなのか」、という、話者のアイデンティティと、それに付随する権利、義務に関わる社会的な問題として捉え、日々の会話の中でこの権利、義務をいかに維持、構築されるかが記述されてきた (Sacks 1972)。とりわけ、ジョン・ヘリティッジが英語の自然会話データにもとづく研究論文の中で、知識の分配をめぐる諸問題とそれに対する会話参加者たちの志向性を指して「認識性 (epistemics)」 (Heritage 2002) という用語をはじめて用いてからは、認識性は、会話分析の重要トピックのひとつとして広く研究されるようになった。その結果、認識性に対する人々の配慮は、じつにさまざまな形で発話の形式、相互行為の進行、展開をつかさどることが示されてきた (Heritage 2013)。</p> <p>本発表では、ヘリティッジを中心に近年急速に展開した会話分析における認識性研究の成果を概観する。とくに、日英語の自然会話における評価発話とその応答から成る発話連鎖を取り上げ、日英語の認識的モダリティ標識、証拠性標識に加え、多岐にわたる文法要素 (評価様式、感嘆詞、時制、強意・緩和表現など) が、じつは知識に関わる権利、義務を主張、尊重、交渉するのに使用されていることを示す。</p> <p>参考文献</p> <p>Heritage, J. (2002). "Oh-prefaced responses to assessments: A method of modifying agreement/disagreement." In C. Ford, B. Fox and S.A. Thompson (eds.), <i>The language of turn and sequence</i>. Oxford University Press, pp. 196–224.</p> <p>Heritage, J. (2013). "Epistemics in conversation." In J. Sidnell & T. Stivers (eds.), <i>The handbook of conversation analysis</i>. Wiley-Blackwell, pp. 370–394.</p> <p>Sacks, H. (1972). "An initial investigation of the usability of conversational materials for doing sociology." In D.N. Sudnow (ed.), <i>Studies in social interaction</i>. Free Press, pp. 31–74.</p>	